大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

＜訳注＞ 憂庵集（第九段～第三十段）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-01-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017887

憂庵集（第九段～第三十段）

戴名世撰
大平　桂一 訳注

序

戴名世とその著『憂庵集』については前回の『言語と文化』第20号（2021年３月刊）所載の憂庵集（第一段～第八段）の序文を参照されたい。一点補足しておくと、今年に入り、艾俊川氏による論文「《憂庵集》是戴名世手稿嗎?」（『文中象外』2012年浙江大学出版社所収）という論文を読んだ。その論文では、戴名世の他の書跡と「憂庵集自筆原稿」を比較したうえで、それが他人による手鈔本であると推定しており、その論証は正しいように思う。ただ『憂庵集』が戴名世の著作であるという結論には変わりないようである。

今回も注釈の大部分は特に断らない限り『漢語大詞典』によった。

第九段

「莽大夫揚雄死」、此朱子特筆、大義凛然。然洪容齋以爲、「劇秦美新、雄不得已而作、夫誦述新莽之德、止能美于暴秦、其深意固可知矣。序所言「配五帝、冠三王、開闢以來未之聞」、直以戲莽耳。」今之布衣寒士稱誦公卿貴人過其實、由容齋之意推之、是亦戲之耳。彼公卿貴人奈何悦其戲己而不悟耶？

「莽の大夫揚雄死す」[1]、此れ朱子の特筆[2]にして、大義凛然たり。然れども洪容齋以爲らく、「劇秦美新は、雄已むを得ずして作る、夫れ新莽の德を誦述するに、能く「暴秦よりも美なり」に止まる、其の深意は固より知る可きなり。序に言う所の「五帝に配し、三王に冠たり、開闢以來未だこれを聞かざるなり」は、直だ以て莽を戲(もてあそ)ぶのみ」と。今の布衣寒士は公卿貴人を稱誦して其の實を過ぐ、容齋の意に由りてこれを推さば、是れ亦たこれに戲(たわむ)るるのみ[4]。彼の公卿貴人は奈何でか其の己を戲ぶを悦びて悟らざるや？

「莽の大夫揚雄死す」、これは朱子が（王莽の死を）春秋の筆法で記述したのであって、大義がはっきりと顕われている。しかし洪容齋は「劇秦美新」は「揚雄がやむを得ず書いたものであり、王莽の新を褒め称えては、暴虐な秦よりはましだ、と述べるに止めており、その深意は明らかだ。劇秦美新の序に、「五帝に配し、三王に冠たり、開

闢以來未だこれを聞かず」とあるのは、王莽をからかっているだけだ」としている。今の無位無官の人が、大臣や貴族を内実なく褒め称えるのは、容齋の意を汲むと、からかっているだけとなる。大臣や貴族はなぜ自身がからかわれているのに喜んでばかりで気付かないのだろう。

第十段

客有論魏晉以後劉聰石勒之興亡及冉閔之事、曰、「彼等之有天下、非其幸也。夫以殺人而得天下、其亡也、亦必爲人所殺、無噍類焉。曷若逐水草居處、衣皮食肉、子孫世世相保之爲樂乎。」韓子曰、「人道亂、而夷狄禽獸不得其情。」彼雖横行一世、富極貴溢、是亦爲不得其情也。

客に魏晉以後劉聰[5]石勒[6]の興亡及び冉閔[7]の事を論ずる有り、曰く、「彼等の天下を有するは、其の幸に非ざるなり。夫れ殺人を以て天下を得たり、其の亡びるや、亦た必ず人の殺す所と爲り、噍類無きなり[8]。曷んぞ水草を逐いて居處し、皮を衣(き)て肉を食し[9]、子孫世世相い保つを樂しみと爲すにかんや」と。韓子曰く、「人道亂れれば、夷狄禽獸も其の情を得ず」[10]と。彼は一世に横行し、富極まり貴溢(みつ)ると雖も、是れも亦た其の情を得ずと爲すなり。

知人が魏晉以降の劉聡・石勒の興亡と冉閔の事跡について話していた、彼が言うには、「彼らが天下を手に入れたのは自分らにとって幸せなことではなかった。人を殺して天下を得たものは、亡びる時には、必ず人に殺される、生き残った例外はない。水や牧草を追い求めて転居し、皮を着て肉を食べ、（そのような遊牧民の生活を行いつつ）子子孫孫安心して暮らすほうが楽しいのではないか？」韓愈は、「人道亂れれば、夷狄禽獸も其の情を得ず」と言った。彼らはその時代に無敵を誇り、富貴を極めたが、かれらもまた「其の情を得ず」（のびのびとは暮らせなかった）のであろう。

第十一段

清節美行、乃人生分内之事、尋常之爲、非有奇怪可以驚人者也。爲吏者、受君之爵、享君之禄、而廉介自持、固天下之通義也。自貪汚成風、相習不以爲怪、而遂有一二矯之者、爲不近人情之行、所謂違道干譽、而欲以冀格外之遷擢、是與于貪婪之甚者也、而自張其行、攘臂大呼、詆訐他人、以炫己長、若以爲奇怪驚人莫于踰此者。今夫女子之不淫、乃其常也、若自以不淫而立于路衢、逢人輒叫號漫罵、且曰、「我貞也、烈也。」吾以知此女之淫也必甚矣。

清節美行は、乃ち人生分内の事、尋常の爲(おこない)にして、奇怪にして以て人を驚かす可き者有るに非ざるなり。吏爲(た)る者、君の爵を受け、君の禄を享(う)く、廉介にして自ら持するは、固より天下の通義なり。貪汚風を成して自り、相い習いて以て怪と爲さず、而う

して遂に一二のこれを矯す者有りて、人情に近からざるの行いと爲すも、所謂道に違いて譽を干め[11]、以って格外の遷擢を冀わんと欲す、是れ貪婪の甚しき者の與し、而して自ら其の行を張り、臂を攘って[12]大いに呼び、他人を詆訐し、以て己の長を炫かす、奇怪にして人を驚かすもの此れを踰える者莫しと以爲うが若し。今夫れ女子の淫らならざるは、乃ち其の常なり、若し自ら淫らならずとして路衢に立ち人に逢わば輒ち叫號漫罵し、且つ「我は貞なり、烈なり」と曰わば、吾は以て此の女の淫らなること必ずや甚だしきを知るなり。

高潔な節操を守ることは人として当然のことでもあり、普通の行為でもあり、何も尋常ではなく、人を驚かすような行いではない。官吏となり、君主から爵位と禄を受け、清廉潔白という規範を守って自己規制することは、天下に普遍の道理である。公共の財産を横領し賄賂を受ける風潮が横行しだしてから、それに慣れてしまって誰も不思議に思わなくなる。そこでこの風潮を正してやろうという人が現れ、人情に遠い行いだと批判したりするが、いうなれば彼らは正義に背いて名誉を求め、特別な抜擢を得ようとするやつらで、これは貪婪な人間と同じである。そいつらは、自分で自分の行為を持ち上げ、腕まくりをして、大声で叫び、他人を攻撃し、自らの長所を誇張し、異常な、人を驚かすという点でこれを上回るものはない、と考えているようだ。女性が淫乱でない、というのはあたりまえのことであるが、もしも自分が淫乱ではないと称して道端に立ち、人に逢うごとに大声で叫び、罵倒して、「私は貞節を守る烈女なり！」と表明するなら、私はその女性が非常に淫乱であると判断するのである。

第十二段

北方多槐、而余寓舍門外有槐二株。春深矣、葉新生、經雨輒有蟲生于葉上、嚙其葉且盡、而槐氣象自是衰颯、絶無生意矣。蟲無所附麗、墮于地、爲螻蟻所制以死。自古蠹國之臣、適以自蠹、未見其計之得也。

北方槐多し、而うして余の寓舍の門外に槐二株有り。春深くなるに、葉新たに生じ、雨を經れば輒ち蟲有りて葉上に生じ、其の葉を嚙りて且に盡きんとし、槐の氣象は是れ自り衰颯して、絶えて生意無し。蟲は附麗[13]する所無く、地に墮ちて、螻蟻の制する所と爲りて以て死す。古自り蠹國の臣、適に以て自ら蠹なうのみにして、未だ其の計の得るを見ざるなり。

北方には槐が多い、私の宿舎の門外にも槐が二株生えている。春が深まると、葉が新たに茂り、雨を経て虫が葉に湧いてくる。虫が葉をかじり尽くすと、槐の生気はその時から衰えていき、生命力が絶えてしまう。虫は頼りにするものが無くなり、地面に落ちて、蟻に捕らえられて死ぬ。昔から国家を食い物にする臣下は、自分で自分を食い物にしているだけであって、その意図が実現した例はない。

第十三段

五行之相生也、金能生水。余嘗疑其説、夫金經火之力、鎔化而爲水、旋即凝結、非真水也。而自古相傳、以水爲金所生者、何也？嘗聞藏金于地者、歴年久爲人所發、則甕中皆水而金不見。余里有一巨室、其子孫貧、聞其家一老婢言、先世藏金二甕在庭柱下、發之、果得二甕、封識如故。及啓甕視之、則清水也、試烹而飲之、與他水無異。乃信金生水之説、古人其有以驗之矣。嗚呼！安得天下之金盡化爲水、而天下有不平者哉。

五行の相い生ずるや、金能く水を生ず。余嘗て其の説を疑う、夫れ金は火の力を經て、鎔化[14]して水と爲るも、旋即(すぐ)に凝結し、真水に非ざるなり。而うして古え自り水を以て金の生む所と爲ると相い傳うるは、何ぞや？嘗て聞く金の地に藏せらるる者は、歴年久しくして人の發する所と爲らば、則ち甕中は皆水にして金は見えずと。余の里に一巨室有り、其の子孫貧しきに、其の家の一老婢の言を聞く、先世金二甕を藏し庭柱の下に在りと、これを發(ひら)くに、果して二甕を得たり、封識は故の如し。甕を啓(ひら)きてこれを視るに及べば、則ち清水なり、試みに烹てこれを飲むに、他水と異なる無し[15]。乃ち信ず金水を生ずの説、古人其の以てこれを驗(ため)す有らん。嗚呼！安(いずく)にか天下の金盡く化して水と爲るを得ん、而して天下に不平なる者有らんや。

五行は互いに生じ、金は水を生ずるとされる。私はずっとこの学説を疑ってきた。金は火の力によって溶けて水となるが（液化するが）、すぐに凝固してしまう。本物の水ではないのだ。ところが昔から水は金から生ずるとされているのはなぜか？地面に隠されていた金が、長い時間がたってから発掘されると、金が入っていた甕の中は水だけで、金はなくなっている、と聞いたことがある。私の郷里に富豪がいたが、子孫は貧窮な生活を送っていた。その家の老いた女中から、先祖が庭の柱の下に金を入れた甕を二つ隠したと聞き、掘ってみると、案の定甕が二つ出て、封緘はもとのままであった。甕を開けて見てみると、真水であった。加熱して飲んでみると、普通の水と変わりなかった。そこでようやく古代の人々が、金が水を生じるという説をすでに実証済みであったことが分かった。ああ、天下の金がすべて水に変化すればいいのに！そうすれば天下に不公平はなくなるだろう。

第十四段

方靈皋曰、「人與物並生于天地之間、而天貴人而賤物。羊豕雞豚之屬、屠割滿街市、日宛轉于刀俎之下、而天不爲之動焉。一人冤死、則或泣鬼神而召變異、其故何哉？蓋以人懐五常之性而物無之也。然則人爲失其五常之性、與禽獸無異、則亦將屠割滿市街、而天不爲之動矣。」由是言觀之、吾爲世之人懼焉。

方靈皋[16]曰く、「人と物と並びに天地の間に生ずるに、天は人を貴んで物を賤しむ。羊豕雞豚の屬、屠割[17]は街市に滿ち、日(ひ)び刀俎の下に宛轉するも、天はこれが爲に動

かず。一人冤死すれば、則ち或いは鬼神を泣かしめ、變異を召(まね)く、其の故は何ぞや？蓋し人は五常の性を懐(いだ)くに物はこれ無きを以てなり。然らば則ち人爲(も)し其の五常の性を失い、禽獸と異なる無ければ、則ち亦た將(も)し屠割市街に滿つるも、天これが爲に動かざるなり」と。是の言に由りてこれを觀れば、吾世の人の爲に懼れるなり。

方靈皋が言った、「人間と物はともに天地の間に生まれたというのに、天は人間を尊重し、物を賤しむ。羊、豚、鶏は町の至る所で屠殺され、毎日毎日刀の下俎の上でバタバタしていても、天はまったく関心を払わない。ところが、一人の人間が無実の罪で死ぬと、鬼神が泣き、天変地異を招くのはなぜか？おそらく人間は五行の性質を備えているのに、物にはそれがない。だとすれば、人間がもし五行の性質を失い、禽獸と同じレベルに落ちたら、人間が町の至る所で屠殺されようとも、天は全く無関心でいるだろう。」彼の言葉から推察すると、私は今の世の人間にも同じことが起こるのではないかと心配するのだ。

第十五段

靈皋又曰、「人終日之間、偶有一念之猜忍、一念之自私、其于君親朋友、偶有一念之欺僞、是此一刻已懐禽獸心矣。雖正人君子而不學、則終日間或未免爲數刻之禽獸。合一月計之、則爲禽獸者數日。合終身計之、則爲禽獸者數年。在正人君子且不免此、而況餘人乎！」余聞之、聳然汗下。

靈皋又曰う、「人終日の間、偶ま一念の猜忍[18]、一念の自私有り、其の君親朋友に于いて、偶ま一念の欺僞有らば、是れ此の一刻已に禽獸の心を懐(いだ)くなり。正人君子と雖も學ばざれば、則ち終日の間或いは未だ數刻の禽獸と爲るを免れず。一月を合してこれを計(はか)れば、則ち禽獸と爲る者數日なり。終身を合してこれを計(はか)れば、則ち禽獸爲る者數年なり。正人君子に在りてすら且つ此れを免れず、況んや餘人においておや！」と。余これを聞きて、聳然[19]として汗下る。

靈皋がさらに言った、「人間は一日の間に、たった一度の猜疑心や残忍な心、たった一度の利己心が生じたり、君臣関係、親子関係、友人との関係において、たった一度相手を騙そうとか、偽ってやろうとかいう気持ちが生ずれば、一時的に禽獸の心が生じたも同じである。聖人君子でも（仁義道徳を）学ばなければ、一日の間に数時間は禽獸でいることになる。それがひと月積み重なれば、数日間禽獸でいることになり、一生涯で計算すれば、数年間禽獸でいることになる。聖人君子でさえもそうなのだから、それ以下の人ならなおさらではないか。」私はそれを聞いて、ぞっとして冷や汗が出た。

第十六段

余往讀書山中、有雙燕巢梁上。雛將出矣、雄者爲蛇所呑。雌者出良久、偕一雄者而歸、與之配。雌雄皆將殼啄破之、盡啣之出、復生卵成雛而去。夫非其種者、禽鳥亦知棄之、而人顧有以他姓子名爲己子者、何哉？若雌者之殺其舊子而別育新子、世之婦女頗多似之者矣。

余往て山中に讀書するに、雙燕有りて梁上に巢くう。雛將に出でんとするに、雄は蛇の呑む所と爲る。雌は出ること良や久しうして、一雄と偕に歸り、これと配す。雌雄は皆殼を將てこれを啄破し、盡くこれを啣えて出し、復た卵を生み雛を成して去る。夫れ其の種に非ざる者は、禽鳥も亦たこれを棄つるを知るに、人顧って他姓の子を以て名づけて己の子と爲す者有るは、何ぞや？雌の其の舊子を殺して別に新子を育てるが若きは、世の婦女のこれに似る者頗る多し。

私が以前山中で勉強していた折、梁の上に二羽の燕が巣を作った。雛が卵から出ようという時に、オスが蛇に呑み込まれた。めすはしばらく巣を離れていたが、別のオスと一緒に帰って来て、つがいになった。オスとメスは殼を破り、中身を啜って出し、さらに卵を産んで雛が孵ると立ち去った。自分の子でなければ、たとえ鳥であっても雛を捨て去るのが習いであるのに、人間には逆に他の姓の子どもをもらってきて自分の子にしようとする者がいるのはなぜだろうか？メスがその元々の子を殺して新しい子を育てる、世間の女性で同じようなことをやっているものが多いこと多いこと。

第十七段

世謂美兆必有吉祥善事之至、余謂不然。余年廿八、家貧授徒、不能讀書、于是日則授徒、夜則讀書于友人趙良冶家。每夜三鼓則燒湯盥面就寢、一日晨起、盥面水中輕氷成蓮花二朶、浮于水上、莖幹鬚蕊皆具、花瓣重重包裹、若刻畫而成。觀者無不嘆異、趙氏一門以爲兩人同讀書、異日同取高第之兆。時冬十月也、踰一月而余遭先君子之喪、嗣是流落困頓、垂老無一事之成、而良冶至今亦無善狀、未見其爲祥也。

世に謂う美兆は必ずや吉祥善事の至る有りと、余謂らく然らずと。余年廿八、家貧しくして徒に授け、讀書する能わず、是に于いて日には則ち徒に授け、夜は則ち友人趙良冶[20]の家に讀書す。每夜三鼓[21]なれば則ち湯を燒し面を盥いて寢りに就く。一日晨に起き、面を盥うに水中の輕氷蓮花二朶を成して、水上に浮き、莖幹鬚蕊皆具わり、花瓣は重重として包裹み、刻畫して成るが若し。觀る者嘆異せざる無く、趙氏一門は以爲らく兩人同に讀書し、異日同に高第を取るの兆なりと。時に冬十月なり、一月を踰えて余は先君子の喪に遭い、是に嗣いで流落困頓し、老いに垂んとして一事の成ること無く、良冶も今に至るも亦た善狀無く、未だ其の祥爲るを見ざるなり。

美しい予兆があれば、必ず吉事や善事が起こるとは世間でよく言われることだが、私はそうは思わない。私が二十八歳の頃、家は貧しく私塾の師匠をやっていて、自分の目指す勉強はできなかった。そこで昼は授業をし、夜は友人の趙良冶の家で勉強した。毎夜三鼓（夜12時～午前２時）になると、湯を沸かして顔を洗って就寝した。或る夜、盥の水面に薄氷の蓮の花が二枚浮かんだ。茎も蘂もすべて揃い、花弁はふっくらと膨らんでいて、まるで絵に描かれた蓮のようであった。それを見たものは皆ため息をつき、趙氏の一門は、我々二人は一緒に勉強しているのだから、将来同時に好成績で及第する予兆だと考えたのであった。時は冬十月、ひと月過ぎると私は父を亡くし、ついで不運に見舞われ、老境が迫っているのに何の業績もあげられず、趙良冶の方は現在に至るまで良い事は全く起こらず、それが吉兆であったとは全く思えないのであった。

第十八段

良冶讀書、資性甚鈍、不能記、亦不善悟。久之、家貧多事、亦輟其業。而一生行事多暗與古人相合、夫子之所謂「不踐迹」者也。連遭父母之喪、凡五六年不入内寢、無寒暑、衣皆齊衰無細布。其兄貪鄙刻薄、爲父所受資財不啻萬金、悉爲兄所得。父母死、凡喪葬之費、兄不出一錢、悉良冶任之。蓋自少至老、債負未嘗一日脱于身也。所分授僅田宅之半、兄扃其己之室不居、而居于弟之宅内。兩人子女皆多、屋又湫隘、良冶或至露處。兄日夜詬詈、無一刻之休、意欲逼之去、而無別賃屋之資、夫婦困辱備至、而曾無一言辨答。當兄之未舉子也、欲移良冶室内、以爲其室宜子、遂兩移之。臨移時、兄指其戸内謂曰、「此地有物、汝好護之。」蓋攘其父數千金而埋于此。時良冶困甚、有知之者曰、「此父母之物、子發之而分其半、未爲不義。」良冶不可。越數年、兄拙（掘）之去、封識如故。與朋友交有信、凡所要約、風雨無一或爽。斗米百錢、時時陰濟貧士、不令人知、而囊篋實匱、不知者以爲其家有餘資、非也。嗟乎！善人吾不得而見之矣、如趙君其庶乎！

良冶の讀書は、資性甚だしく鈍く、記すること能わず、亦た善悟せず。これを久しうして、家貧しく事多くして、亦た其の業を輟(や)む[22]。而うして一生の行事は多く暗(ひそ)かに古人と相い合(がっ)し、夫子の所謂(いわゆる)「迹を踐(ふ)まざれば」のごとき者なり[23]。連(つづ)けて父母の喪に遭い、凡そ五六年内に入りて寢ねず、寒暑と無く、衣は皆齊衰[24]にして細布無し。其の兄は貪鄙刻薄にして、父の受(さず)くる所と爲る資財は啻(た)だ萬金のみならず、悉く兄の得る所と爲る。父母の死するや、凡そ喪葬の費は、兄一錢をも出(いだ)さず、悉く良冶にこれを任す。蓋し少(わか)き自り老いに至る、債負は未だ嘗(と)て一日も身を脱せざるなり。分授する所は僅に田宅の半ばにして、兄其の己の室を扃じて居らず、弟の宅内に居る。兩人の子女皆多く、屋も又た湫隘(せま)たり、良冶或いは露處するに至る。兄は日夜詬詈し、一刻の休むこと無く、これに逼(ほっ)りて去らしめんと意欲するも、別に屋を賃(か)りるの資無く、夫婦の困辱は備至するも、曾て一言の辨答も無し。兄の未だ子を舉げざるに當る

や、良冶の室内に移らんと欲し、以爲(おもえら)く其の室は子に宜(よろ)しと、遂(よ)りて兩(ふた)たびこれに移る。移る時に臨み、兄其の戸内を指して謂いて曰く、「此の地に物有り、汝好くこれを護れ」と。蓋し其の父の數千金を攘(ぬす)みて此(ここ)に埋(うず)む。時に良冶困(まず)しきこと甚だし、これを知る者有りて曰く、「此れは父母の物なり、子これを發して其の半ばを分つも、未だ不義と爲さざるなり」と。良冶は不可なりとす。越ゆること數年、兄これを掘（原文は「拙」）り去るに、封識は故の如し。朋友と交りて信有り、凡そ要約する[25]所、風雨[26]あるも一も或いは爽(たが)うこと無し。斗米百錢、時時陰かに貧士を濟(たす)け、人をして知らしめず、而うして囊篋は實(まこと)は匱(つ)き、知らざる者は以て其の家には餘資有ると爲すは非なり。嗟(あ)あ！善人は吾れ得てこれを見ざるなり[27]、趙君の如きは其れ庶(ちか)きか！

趙良冶はいくら勉強しても、資質が鈍く、暗記力は弱く、悟性も優れていなかった。時が過ぎ、家は貧しく多事多難で、商売もやめてしまった。しかし、彼の生涯にわたる行いは古人の善行と暗合し、孔子が「迹を踐まざれば」と形容する人（善人）そのものである。両親が立て続けになくなると、五六年は妻と寝室をともにせず、寒い時も暑い時も、粗い麻の喪服を着て、軟らかい布製の服は身につけなかった。彼の兄は貪婪で卑しく、しかも人情にかける性格であり、父が残した財産は一万金を下らないのに、すべて兄にもっていかれた。父母が亡くなると、葬儀の費用は一銭も出さずに、すべて良冶に負担させた。若いころから老境に至るまで、負債は一日たりとも彼から離れなかった。良冶が受け継いだのは不動産の半分に過ぎないのに、兄は自分の家に鍵をかけて住もうとせず、弟の住宅の中に住んでいた。兄弟には子どもが多く、家も低く狭かったので、良冶は時に露天で夜を明かすこともあった。兄は一日中絶え間なく良冶を罵り、彼を追い出そうとしていたが、別に家を借りる資金もなく、良冶夫婦は困り果てたが、一言も抗弁しなかった。兄にまだ子どもができなかった時、良冶の部屋が子どもを作り易いと考えて引き移ろうとし、部屋を再度引っ越した。移る際に、兄は自分の部屋の中を指して、「ここには良い物がある、しっかり保管しろよ」と言った。おそらく兄は父の金数千金を盗んでそこに埋めたのである。当時良冶はひどく貧窮に苦しんでいたので、事情を知る人が彼に言った、「これは君の両親の物なのだから、その子がそれを掘り出して半分を分けてもらっても、不義の行いとは言えまい」。良冶はそれはだめだと判断した。数年後に兄がそこを掘って出すと、封と表書きはそのままであった。友人とは信義を以て交わり、一端約束すると、風が吹いても雨が降っても、けっして違えることはなかった。一斗の米の値段が百銭の時も、こっそりと貧しい士大夫の生活を援助し、人に知られないように努めた。財布は実はすっからかんだったのだが、事情を知らない人は趙良冶の家は裕福だと誤解しているのは、間違っている。ああ、善人というものに私は出会ったことはないが、趙君はそれに近いのではないか。

第十九段

余嘗由水道自江寧往天津、見糧艘北行、啣尾而去、凡一二千里不絶。嗚呼！此東南民命也、東南之人何罪之有哉？西北之人惰（隋）窳、水利不興、種植之法不講、其憂在萬世、而歴代漫不爲意、可不爲痛哭流涕已乎！

余嘗て水道に由り江寧自り天津に往き、糧艘の北行するを見るに、啣尾して[28]去り、凡そ一二千里絶えず。嗚呼！此れ東南の民の命なり、東南の人何の罪かこれ有らんや？西北の人は惰（隋）窳[29]にして、水利は興さず、種植の法は講ぜず、其の憂いは萬世に在るも、歴代漫く意と爲さず、痛哭流涕を爲さざる可けんや！

私はある時運河を通り、江寧から天津に向かった。糧食を運搬する船が途切れずに続き、千里、二千里を通過する間、絶えることはなかった。ああ、これは東南の民の運命である。東南の民に何の罪があろうか。西北の民は怠け者ばかりで、農業用水路も作らないし、栽培法も研究しない。東南の民の憂いは古代からずっと続いてきているのに、歴代の王朝は全く気にもかけない、これはまことに悲しいことではないか！

第二十段

人之記性在顙。人偶有失記者、偈而思之、目輒上瞬、首輒仰、蓋于顙中覓之也。西洋人有于顙内分間之法、某間記事、某間記某書、又某間記某書。其記之法、默書其字之筆畫于内、蓋皆以意爲之也。余嘗試之、蓋有效焉。

人の記性は顙に在り。人偶ま記を失う有る者、偈めてこれを思えば、目は輒ち上に瞬き、首は輒ち仰ぎ、蓋し顙中に于いてこれを覓めるなり。西洋人に顙内に于いて間を分つの法有り、某間には事を記し、某間には某書を記し、又た某間には某書を記す。其のこれを記すの法は、其の字の筆畫を内に默書す、蓋し皆意を以てこれを爲すなり。余嘗てこれを試みるに、蓋し效有り。

人の記憶力は顙（頭頂部）に宿っている。偶然物忘れをして、懸命に思い出そうとする時には、上目遣いになって瞬きを繰り返し、首は上向きになる。これは顙の中を探っているのである。西洋人には顙の中を分割する方法があり[30]、ある部分にはある事を記憶させ、ある部分にはある書物を記憶させ、ある部分にはある書物を記憶させる。記憶の方法はというと、ある字の筆画を顙のある部分に黙ってただ書き留めておく、おそらく字のイメージを書き留めるということなのである。私はこのやり方を試したことがあるが、なかなか効果があった。

第二十一段

種梧之法、用沃土一方爲泥、以梧子數千種之。俟其長尺許。即分開遍栽于藩墻籬落之

下、毎間四五寸即栽一株、須擇其直者栽之。長至二三尺、又擇灣（彎）曲去之。踈密相稱、大約相離不過尺許、刪剪其枝、獨存其最上者。編竹以輔之、勿使爲風所動揺。閲四五年、即長丈許、漸漸緊密如城、而城上之綠蔭參天而散垂、亦一奇觀、不但可防穿窬之盗而已也。

梧を種えるの法、沃土一方を用いて泥と爲し、梧子數千を以てこれを種う。其の長の（一）尺許になるを俟ち、即ち分開して遍く藩墻籬落の下に栽え、四五寸を間てる毎に即ち一株を栽え、須く其の直なる者を擇びてこれを栽う。長さ二三尺に至り、又た灣（彎）曲を擇びてこれを去る。踈密相い稱い、大約相離れること（一）尺許を過ぎず、其の枝を刪剪し、獨り其の最上の者を存す。竹を編みて以てこれを輔け、風の動揺する所と爲らしむること勿れ。四五年を閲れば、即ち長さは（一）丈許となり、漸漸く緊密なること城の如く、城上の綠蔭は參天にして散垂し、亦た一奇觀なり、穿窬の盗[31]を防ぐ可きのみにあらざるなり。

梧（あおぎり）を植える方法は以下の通り、柔らかく肥えた土地に水をまわして泥土とし、梧のタネ数千個を植える。一尺ほどまで伸びたら、分割して垣根の下に遍く植えかえる。まっすぐな株を選び、四、五寸間隔で一株を植える。高さが二、三尺くらいになったら、曲ったものを選んで除去する。疎密のバランスがとれるようにし、一尺ほどの間隔とする。枝を剪定し、一番良いものだけを残す。風が吹いても動揺しないように、竹を編んで補助とする。四五年も経つと、一丈あまりに成長し、段々と城壁のように緻密になってくる、城壁の上には緑なす影が空まで伸び、（枝は）バラバラに地面まで垂れ、奇観をなす。壁や垣根を破って侵入する泥棒を防ぐだけではないのである。

第二十二段

淮安之枳、購得四五斗、遍種于墻屋之四圍。其幹甚固、其枝葉交錯蔓延、有刺、其葉青、其子赤。久之、高且與人齊、而墻落皆可廢、鷄犬盗賊皆不能入。江南之人多用槿爲籬、取其華葉可觀、然僅可用之于藩籬之内、而以枳爲藩籬、勝于墻壁多矣。或曰、此物斤斧皆不能施而畏火。

淮安の枳、四五斗を購い得て、遍く墻屋の四圍に種う。其の幹は甚だ固く、其の枝葉は交錯蔓延し、刺有り、其の葉は青く、其の子は赤し。これを久しくして、高さは且に人と齊しくならんとし、墻落は皆廢す可く、鷄犬盗賊も皆入ること能わず。江南の人は多く槿を用て籬と爲し、其の華葉の觀る可きを取るも、然れども僅にこれを藩籬の内に用いる可きのみにして、枳を以て藩籬と爲さば、墻壁に勝ること多し。或ひと曰く、「此の物は斤斧[32]も皆施すこと能わざるも火を畏る」と。

淮安の枳殻(からたち)の種を四、五斗買ってきて、垣根の周囲に植える。その幹は非常に堅く、枝葉は交錯し蔓延していき、棘があり、葉は青く、実は赤い。しばらくすると、高さは人の背丈ほどになり、垣根は取り外してもよくなり、鶏や犬、コソ泥も入り込めなくなる。江南の人々は花や葉がきれいだという理由で槿(むくげ)を垣根にしているが、垣根の内側に用いることができるだけである。枳殻を垣根代わりにすると、土塀よりもずっと堅牢である。「これは斧では倒せないが、火には弱い」という人もいる。

第二十三段

移竹之法、擇竹之最大者、鋸去之、止留一節、連根抜起、而于節上鑿一小孔、投硫黄（磺）二三錢于其内、孔上封之以泥、倒埋于土。閲一二年、竹已成林。

移竹の法、竹の最大なる者を擇(えら)び、鋸(のこぎり)もてこれを去り、止(た)だ一節を留(とど)め、根を連ねて抜起し、節上において一小孔を鑿(うが)ち、硫黄（磺）二三錢を其の内に投じ、孔上これを封ずるに泥を以てし、倒(さか)さに土に埋む。一二年を閲て、竹已に林を成す。

竹を移植する方法は以下のとおり。竹の最も背の高いものを選び、一節を残して鋸で取り去り、根ごと引っこ抜く。残した節に小さな穴を一つあけ、硫黄二三銭を中に注ぎ、穴は泥で封をし、逆さまに地面に植える。一二年するうちに竹林が出来上がる。

第二十四段

遂寧馬紹愉、字成愚、萬曆中舉人。下第留京師、授徒中官田氏。有田弘遇者、賈京師、往來中官家、隨識紹愉。後弘遇得官守備、爲淮安分巡僉事中軍。蜀人左某、巡按淮揚、與紹愉同鄉有舊、紹愉來謁、復遇弘遇于淮安、相得甚歡、約爲兄弟。既、紹愉謁選爲揚州之寶應、而弘遇遷官去、屬紹愉妻子。未幾、弘遇以軍事下獄、謫戍大同。初、弘遇有女、許聘石隷湯九州之子、及歸湯氏、而湯氏子傴僂不能伸、又其性素愚、不辨菽麥、遂不與婚。崇禎初、詔選妃嬪、九州出女、得中選、即田妃也、拜九州官。九州奏、「妃係臣養女、其父田弘遇、得罪戍大同。」于是赦弘遇、授之都督、而以九州爲參將、官至總兵。紹愉令寶應、罷官、又起爲建德、又罷、而弘遇已貴、遂往謁弘遇于京師。是時邊事急、蜀人陳新甲新得君、拜兵部尚書、弘遇往賀、因曰、「吾有故人馬紹愉者、公鄉人也。其才可用。今罷斥、公能庇之乎？」會朝廷欲東和、新甲奏以紹愉爲行人、加兵部主事以往、而參將魯宗孔副之。既而和議爲黨人所敗、斬新甲而下紹愉于獄。甲申之變、紹愉自獄中逃出、至南京。適左懋第復奉詔和議、仍以紹愉爲太僕少卿、副懋第行。懋第死而紹愉放還、遂僑寓儀揚間。年七十九、卒、葬瓜州。

遂寧[33]の馬紹愉[34]、字は成愚、萬曆中の舉人なり。下第して京師に留まり、徒を中官の田氏に授く。田弘遇[35]なる者有あり、京師に賈(あきない)し、中官の家に往來し、隨いて紹愉を識る。後に弘遇は守備に官することを得て、淮安分巡僉事中軍と爲る。蜀人の左某、

淮揚に巡按[36]たり、紹愉と同郷にして舊(よしみ)有り、紹愉來りて謁し、復た弘遇に淮安に遇い、相い甚だ歡ぶを得て、約して兄弟と爲る。既にして、紹愉は謁選せられて揚州の寶應と爲り、弘遇は官を遷りて去り、紹愉に妻子を屬す。未だ幾ばくならずして、弘遇は軍事を以て下獄し、大同に謫戍せらる。初め、弘遇女有り、石隸の湯九州[37]の子を許聘し、湯氏に歸(とつ)ぐに及び、湯氏の子は傴僂にして伸ばすこと能わず、又た其の性も素より愚かにして、菽麥を辨(わか)たず[38]、遂に與に婚せず。崇禎の初め、詔して妃嬪を選ぶに、九州女を出し、選に中(あた)るを得たり、即ち田妃[39]なり、九州に官を拜(さず)く。九州奏すらく、「妃は臣の養女に係り、其の父田弘遇は、罪を得て大同を戍(まも)る。」是に于いて弘遇を赦(ゆる)し、これに都督を授け、九州を以て參將と爲し、官は總兵に至る。紹愉は寶應[40]に令たり、官を罷め、又た起ちて建德[41]と爲り、又た罷め、弘遇已に貴(たっと)ければ、遂に往きて弘遇に京師に謁す。是の時邊事急なり、蜀人陳新甲[42]新たに君を得て[43]、兵部尚書を拜し、弘遇往きて賀し、因りて曰く、「吾に故人馬紹愉なる者有り、公の鄉人なり。其の才用いる可し。今罷斥せらる、公能くこれを庇(まも)るや？」と。會(たまた)ま朝廷東和を欲し、新甲奏して紹愉を以て行人と爲し、兵部主事を加えて以て往かしめ、參將魯宗孔をもってこれに副たらしむ。既にして和議は黨人[44]の敗る所と爲り、新甲を斬りて紹愉を獄に下す。甲申の變、紹愉は獄中自り逃(のが)れ出で、南京に至る。適たま左懋第[45]復た詔を奉じて和議をなし、仍(ま)た紹愉を以て太僕少卿と爲し、懋第に副として行く。懋第死して紹愉は放還せられ、遂に儀揚の間に僑寓す。年七十九にして卒し、瓜州[46]に葬らる。

遂寧の馬紹愉、字は成愚、萬曆年間の舉人である。会試に落第して都に留まり。宦官の田氏の私塾で教えていた。田弘遇という人がいて、都で商売をしており、宦官の田氏の家に出入りしていて、紹愉と顔見知りになった。後に田弘遇は守備の官職を得て、淮安分巡僉事中軍となった。蜀の人左（左という姓の）某(なにがし)が、巡按御史として淮揚に回ってきて、馬紹愉の同郷の知り合いだったため、馬紹愉は会いに行き、さらに淮安で田弘遇に逢い、意気投合して、義兄弟となった。馬紹愉は吏部の選考を経て揚州の宝応の知県に任じられ、田弘遇は転任してその地を去るために、妻子を馬紹愉に託した。ほどなく田弘遇は軍事に関する案件で下獄し、大同の守備隊に流された。さて、田弘遇には娘がおり、石隸の湯九州の息子と婚約していたが、いざ湯氏に嫁ぐという段になって、湯氏の息子は背中が曲がっており、またさほど頭が良くなく、無知蒙昧であったので、とうとう結婚はしなかった。崇禎年間の初めに、貴妃の選考が行われた時、湯九州は娘を応募させ、彼女が選ばれた、これが田貴妃であり、九州に官職が与えられた。九州は次のように上奏した、「妃は私の養女であり、本当の父田弘遇は罪を得て、大同の守備隊におります。」そこで田弘遇に恩赦を与え、都督を授け、九州をその参将とし、総兵まで昇進した。馬紹愉は宝応の知県となり、それを辞した後、さらに建德の知県となり、また辞職した後で、田弘遇が出世したため、都に出て田弘遇に会いに行った。当時辺境地帯は不穏になっており、蜀の人陳新甲が皇帝の信

任を得て、兵部尚書を拝命したので、田弘遇は祝いを述べに行き、「私の古い友人に馬紹愉という者がおり、あなたの同郷人です。才能に溢れていますが、今罷免されました、あなたは彼を庇護できますでしょうか？」と言った。ちょうど朝廷が東の満州族と和睦しようとしていた時で、陳新甲は馬紹愉を推薦して行人とし、兵部主事の肩書きを加え、参将魯宗孔を副官として任に赴かせた。和議が東林党によって潰されると、陳新甲は斬られ、馬紹愉は下獄した。甲申の変（1644年、李自成の反乱軍が北京に乱入し、明が滅亡した事件）の際、馬紹愉は獄中から逃亡し、南京まで逃走した。たまたま左懋第が詔勅を奉じて和議をしようとしており、また馬紹愉を太僕少卿に任じ、左懋第の参謀として交渉に行かせた。左懋第が死ぬと馬紹愉は釈放されて帰郷し、儀真・揚州の辺りに流寓していた。七十九歳で亡くなり、瓜州に葬られた。

第二十五段

沙羅樹、枝幹甚古、而葉之緑他樹皆不得與比、清芬高潔、蒼翠欲滴。金陵諸寺中往往有之、其蔭甚廣、余毎徘徊其下不忍去。記往年遊于閩、見榕樹甚愛之、耿氏既滅、其廢殿之下有四株、尤可愛。其品格似遜娑羅遠甚也。

沙羅樹は、枝幹甚はだ古にして、葉の緑は他樹皆與に比ぶるを得ず、清芬高潔にして、蒼翠滴(したた)らんと欲す。金陵の諸寺中に往往にしてこれ有り、其の蔭(かげ)甚だ廣く、余其の下を徘徊する毎(たび)に去るに忍びず。記す往年閩に遊び、榕樹を見て甚だこれを愛す。耿氏[47]既(すで)に滅び、其の廢殿の下に四株有り、尤も愛す可し。其の品格は娑羅に遜(ゆず)りて遠きこと甚だしきに似たる。

沙羅双樹は枝も幹もとても古拙な感じだが、葉の濃い緑は他の樹と較べるものもなく、高潔ないい香りがし、滴(したた)るような緑色である。金陵の寺の中には沙羅双樹を植えているところもあるが、その蔭はとても広く、私はその下を歩きまわる度に立ち去りがたい思いがする。そういえば、昔閩（福建省）を旅した時、ガジュマルを見てとても気に入った。耿氏が滅びた後、その廃殿にはガジュマルが四株残っていて、とても美しかった。ただその品格は随分と沙羅双樹に劣るようである。

第二十六段

風蘭、福建漳海間甚多、江南徽州[48]亦有之。不用土種、但將蘭懸于屋梁當風處、兩三日即當以鷄魚血水浸之。夜或懸于樹上得露、天雨時亦然。又以銅圈束于根、其葉自茂。花到五六月即開。其性喜風畏日而不須土種、亦異種也。

風蘭[49]は、福建の漳海の間[50]に甚だ繁茂し、江南の徽州も亦たこれ有り。土種を用いず、但だ蘭を將(もっ)て屋梁の風に當る處に懸け、兩三日すれば即ち當に鷄魚の血水を以てこれを浸(ひた)すべし。夜或いは樹上に懸けて露を得、天雨ふる時も亦た然り。又た銅圈を

以て根に束(つか)ねれば、其の葉は自ら茂る。花は五六月に到れば即ち開く。其の性は風を喜び日を畏れ土種を須いず、亦た異種なり。

風蘭は、福建の漳海あたりに非常に多く繁茂しており、江南の徽州にも生息している。土で育てるのではなく、風蘭を屋根の梁の風が通るところに懸けておき、二三日したら鶏や魚の血を溶かした水を与える。夜は木の上に吊るして露を承け、雨が降った時にも同様にする。さらに銅の輪で根をくくっておくと葉が自然に茂ってくる。花は五月六月になると開く。この植物の性質として、風を好み日光を懼れ、土に植える必要はない、まことに変わった植物である。

第二十七

阮晉、江寧人。其女絶色、弘光元年、禮部尚書錢謙益選爲帝后、未入宮而南京破、謙益獻阮氏于豫王爲贅、豫王以阮氏賜孔有德。阮氏見有德、上坐不爲禮、有德怒之、曰、「此女無禮、吾當殺其一家！」阮氏懼而從之。已而有德（駐）廣西、阮氏一門皆從之。有德死、妻妾皆逼之從死、舉火焚其宅。阮氏亦自縊、兄嫂皆死。阮晉流落未歸。其群從居虎距關、與余隣。

阮晉[51]、江寧の人。其の女絶色あり、弘光元年[52]、禮部尚書錢謙益[53]選びて帝の后と爲すも、未だ宮に入らずして南京破れ、謙益は阮氏を豫王に獻じて贅と爲す、豫王[54]は阮氏を以て孔有德[55]に賜う。阮氏有德に見(まみ)ゆるに、上坐して禮を爲さず、有德これを怒り、曰く、「此女無禮なり、吾當に其の一家を殺さん！」と。阮氏懼れてこれに從う。已にして有德廣西に駐し、阮氏一門も皆これに從う。有德の死するや、妻妾皆これに逼(せま)りて從死せしめ、火を擧げて其の宅を焚く。阮氏も亦た自縊し、兄嫂も皆死す。阮晉は流落して未だ歸らず。其の群從[56]は虎踞關[57]に居り、余と隣となる。

阮晋は江寧の人である。その娘は絶世の美女で、弘光元年、礼部尚書の錢謙益が彼女を皇后候補に選んだが、宮殿に入るまでに南京が陥落し、錢謙益は阮氏を豫王に献上して手土産とし、豫王は阮氏を孔有德に賜った。阮氏は有德に会った時に、上座に座って礼を行わなかった。有德は怒って、「この女は無礼なやつだ、一家皆殺しにしてやる」と言った。阮氏は恐れをなして彼に服従した。有德が広西に駐留すると、阮氏の一門は皆つき従った。有德が死ぬと、妻や妾たちは皆彼女に殉死を迫り、火をかけて邸宅を焼いてしまった。阮氏も縊死し、兄や兄嫁も皆亡くなった。阮晋はあちこち放浪して落ちぶれ、江寧には帰還できなかった。彼の従兄や甥たちは南京の虎踞関に住み、私と隣組であった。

第二十八段

明末、餘姚人孫業釗以舉人爲房縣令、張獻忠破房、囚之營中。時總督熊文燦力主和議、

招獻忠入城面決機宜、獻忠請兩監司到營爲質乃就道、熊如約。監司款賊帳、獻忠宴之、設兩座南向、坐監司、一座西向、坐業釗、北向自座、俱無几席。金鼓迭奏、歌舞襍進。見四美人奉巵酒、各趨座下長跪、頂酒授賓啐酒、美人受巵卻退。復見八美人半持匕箸、半執餚核、如前儀。酒舉、邊（籩）豆百品、美人爵壘（罍）、金銀犀玉、無一重見者。飲半酣、獻忠起爲壽、令曰、「除房縣官天性不飲外、侑酒婢子不克酬客、傾觸、視軍法！」毎監司謝不勝酒、輒于座隅斬一美人、呈首曳尸、多至十數、熱血波地、霑濡衣襟。兩監司相顧失色、勉強覆杯無算、未終、已嘔噦徧體、冠帶顛越、不能出聲應對、竟未暇稍及諭撫之事。獻忠戟指大笑、復大罵曰、「彼家勦撫兩局、此當事莫大之舉、西南存亡所關、而用人如此、其能辦乎。吾當勒數騎往、熊君豈敢動吾車馬從者乎！」即上馬造熊幕、飲竟日、從容而反。後業釗爲人言其事。

明末、餘姚[58]の人孫業釗[59]は舉人を以て房縣[60]の令と爲り、張獻忠[61]の房を破るや、これを營中に囚う。時に總督熊文燦[62]は力めて和議を主し、獻忠を招きて城に入らしめて機宜を面決せんとし、獻忠は兩監司[63]を營に到らしめて質と爲し乃めて道に就かんと請うに、熊は約の如くす。監司は賊帳に款り、獻忠これを宴し、兩座を南に向けて設け、監司を坐せしめ、一座を西に向け、業釗を坐せしめ、北に向きて自ら座し、俱に几席無し。金鼓迭いに奏し、歌舞襍進す。四美人の巵酒を奉げ、各の座下に趨りて長跪し、酒を頂げて賓に授け酒を啐ましめ、美人巵を受けて卻退するを見る。復た八美人半ばは匕箸を持ち、半ばは餚核を執ること、前儀の如きを見る。酒舉げられ、邊（籩）豆百品、美人爵壘（罍）、金銀犀玉、一として重ねて見る者無し。飲みて半ば酣なるに、獻忠起ちて壽を爲し、令して曰く、「房縣の官天性飲まざるを除くの外、酒を侑むるの婢子酬客に克えず、傾觸するは[64]、軍法に視えん！」監司の酒に勝えずと謝する毎に、輒ち座隅において一美人を斬り、首を呈し尸を曳き、多きこと十數に至り、熱血地に波うち、衣襟を霑濡す[65]。兩監司相い顧みて色を失い、勉強いて杯を覆えす[66]こと無算[67]なり、未だ終らずして、已に嘔噦體に徧ねく、冠帶顛越し、聲を出して應對すること能わず、竟に未だ稍やも諭撫の事に及ぶに暇あらず。獻忠は指を戟し[68]大いに笑い、復た大いに罵りて曰く、「彼の家　勦撫兩局は、此れ當事莫大の舉、西南の存亡關する所なるに、人を用いること此の如し、其れ能く辦ぜんや。吾は當に數騎を勒いて往かば、熊君豈に敢えて吾が車馬從者を動かさんや！」と。即ちに馬に上りて熊の幕に造り、飲むこと竟日、從容として反る。後に業釗人の爲に其の事を言う。

明の末期、餘姚の人孫業釗は、挙人の資格で房県の令となったが、張獻忠が房県を攻略すると、彼を軍営の中に収監しておいた。当時の総督熊文燦は和議に熱心で、張獻忠を城中に招いて直接会って重要事項を決定しようとした。張獻忠は二人の監司を人質として軍営に来させてから出発すると言ってきて、熊文燦はその条件を呑んだ。二人の監司が賊の陣営にやって来ると、張獻忠は宴を開いて饗応し、南向きに二座を設

けて二人の監司を座らせ、西向きに一座を設けて孫業釗を座らせ、自分は北向きに座り、肘掛や敷物は置かなかった。打楽器が鳴らされ、歌舞隊がどっと入ってきた。四人の美人が大きな酒杯を捧げて現れ、それぞれ座席に趣いて跪き、頭上に酒を捧げ持って客人に飲ませ、美人は酒杯を受けて下がるのを見た。さらに八人の美人がやってきた。半分は箸を持ち、半分は料理や果物を持ち、先ほどのやりかたで客人に供するのを見た。乾杯が終わり、御馳走が山と出てきて、美人・杯・酒樽、金銀・犀・玉の器など、一つも重複するものがなかった。宴も酣となり、張獻忠が立ち上がって長寿を祈る言葉を述べた後、命令を下した、「房の県令がもともと酒を飲めないのを例外として、酒を勧める侍女たちであまりにも客あしらいが下手なもの、粗相をしたものは、軍法を適用せよ。」監司がもう酒が飲めませんという度に、一座の隅で美人を一人殺害させ、首を示し遺体を引きずり出し、その数が十数人に達して、あたりは血の海となり、衣服は血で染まった。二人の監司は顔を見合せて真っ青になり、無理をして杯に注がれた酒を無数に飲みつくした。宴会が果てないうちに体中吐いたもので汚れ、冠やベルトが乱れ、声を出して応対することができず、招撫の交渉に入ることはまったくできなかった。張獻忠は指を突き出して高笑いし、さらに「そちらが討伐か和議か二つに一つを決断しようというのは、当面の最重要課題であり、西南の存亡にかかわる一大事のはず、であるのにこの程度の連中を使っていては、どうして交渉ができよう。私が数騎を引き連れていけば、熊君は我らが一行に手向かいできようか？」と彼らを大いに罵った。すぐに馬に乗って熊文燦の軍営に行き、一日中酒を飲んだあげく、悠然と帰還した。ずっと後になり、孫業釗が知り合いにこの話をしたとのことである。

第二十九段

崇禎甲申春、李自成破秦晉、上拜總兵唐通爲定西伯、守居庸關。通以居庸降賊、隨賊入京。賊虞寧遠總兵呉三桂之入關也、遣賊禦之于山海、復慮三桂從河套過河入山西、乃遣唐通守石峽。先是、保德州人陳奇瑜爲五省總督、實縱賊于車箱谷、以成甲申之禍、通故在其麾下。奇瑜好賄、家巨富、恐被禍、陰召通以兵來護其家。而保德臨河、與陝西之府谷一河相望、不一二里、皆有險可守。于是通駐保德、而使其中軍劉汝器駐府谷、時甲申四月下旬也。已而知自成敗走陝西、通知事不成、仍稱定西伯、爲先帝哭靈、沿河數州縣皆據之。自成既走西安、恐邊塞有事、密教通執故總督陳奇瑜、故總兵尤世禄、解赴西安。世禄與尤世威兄弟不相能、既罷官、別居府谷。先是、世威一家盡節于楡林。至是、通使人送奇瑜、世禄于西安、行三十里追還奇瑜、而世禄未至西安即自殺。已、自成知通且叛己、使其兄子一隻虎李過所稱小瞎子者、將兵先圍府谷。府谷守其嚴、賊前鋒王平不能破、懼誅、乃入城降、後隷洪承疇、爲湖南總兵。李過仍盡力攻之、忽一夕走且盡、蓋聞西安已破、走從自成于襄陽。是時九壬統兵往山西、略沿邊一帶、唐通以其衆降。通兵頗有紀律、保德人多稱之。九壬挾通入京師、解其兵柄、封爲定西侯。居十餘年、意忽忽不樂、仍思出爲大鎮、乃繳還定西侯印、世祖受之、與之一品階級、

而不使之出。通以康熙初死、其子廕襲之者、多爲州縣官。通既降清、而劉汝器不願降、自請解兵歸農。後姜瀼（瓖）起大同、全晉皆震動、汝器與高有才據府谷。有才、神木人、故皆賊也、殺神木僉事起事、即僉事道皂隷也。劉化麟據保德、相爲唇齒、大兵圍之、踰數年乃克。有才食盡、盡殺府谷人食之、逃匿者不及數十人、與汝器投河死。化麟爲州人所殺、攜其頭出降。唐通、涇陽人。

崇禎甲申の春、李自成[69]秦晉を破り、上は總兵唐通[70]を拜して定西伯と爲し、居庸關[71]を守らしむ。通は居庸を以て賊に降り、賊に隨いて京に入る。賊は寧遠總兵呉三桂[72]の關に入るを虞れ、賊を遣りてこれを山海に禦がしめ、復た三桂の河套從り河を過りて山西に入るを慮んぱかり、乃ち唐通を遣りて石峽[73]を守らしむ。是より先、保德州[74]の人陳奇瑜[75]は五省總督爲り、實は賊を車箱谷[76]に縱ち、以て甲申の禍を成す、通は故と其の麾下に在り。奇瑜は賄を好み、家は巨富あり、禍を被るを恐れ、陰かに通を召して兵を以て來りて其の家を護らしむ。保德は河に臨み、陝西の府谷[77]と一河相い望み、一二里ならず、皆險の守る可き有り。是に于いて通は保德に駐まり、其の中軍劉汝器をして府谷に駐まらしむ、時に甲申四月下旬なり。已にして自成の陝西に敗走するを知り、通は事の成らざるを知り、仍お定西伯と稱し、先帝[78]の爲に哭靈し、河に沿う數州縣皆これに據る。自成は既に西安に走り、邊塞に事有らんことを恐れ、密かに通をして故の總督陳奇瑜、故の總兵尤世禄[79]を執えて、西安に解赴せしめんとす。世禄は尤世威[80]兄弟と相い能まず、既に官を罷め、府谷に別居す。是より先、世威の一家は節を楡林に盡くす。是に至りて、通は人をして奇瑜世禄を西安に送らしめ、行くこと三十里にして奇瑜を追還せしむるに、世禄は未だ西安に至らずして即ち自殺す。已にして、自成は通の且に己に叛かんとするを知り、其の兄の子一隻虎李過[81]稱する所の小瞎子[82]なる者をして、兵を將いて先ず府谷を圍ましむ。府谷は其の嚴を守り、賊の前鋒王平は破ること能わず、誅せらるるを懼れ、乃ち城に入りて降り、後に洪承疇[83]に隷せられて、湖南總兵と爲る。李過は仍お力を盡してこれを攻め、忽ち一夕にして走げ且つ盡く、蓋し西安已に破れると聞き、走げて自成に襄陽[84]に從うならん。是の時九壬[85]は兵を統べて山西に往き、沿邊一帶を略し、唐通は其の衆を以て降る。通の兵は頗る紀律有り、保德の人多くこれを稱す。九壬通を挾みて京師に入り、其の兵柄を解き、封じて定西侯と爲す。居ること十餘年、意忽忽として樂しまず、仍た出でて大鎮と爲らんことを思い、乃ち定西侯の印を繳還するに、世祖これを受け、これに一品の階級を與えるも、これを出しめず。通は康熙の初めを以て死し、其の子これを廕襲する者は、多くは州縣の官と爲る。通既に清に降るも、而うして劉汝器は降るを願わず、自ら兵を解きて歸農するを請う。後に姜瀼（瓖）大同に起こるや、全晉皆震動し、汝器は高有才と府谷に據る。有才は、神木[86]の人なり、故と皆賊なり、神木の僉事を殺して起事し、即ち僉事道の皂隷なり。劉化麟は保德に據り、相い唇齒爲り、大兵これを圍むに、數年を踰えて乃く克つ。有才食盡き、盡く府谷の人を殺してこれを食し、逃匿する者數十人に及ばず、汝器と河に投じて死す。化麟は州人の殺

す所と爲り、其の頭を攜えて出(い)でて降る。唐通は、涇陽の人なり。

崇禎甲申の春、李自成が秦と晋（陝西省と山西省）を攻略したため、陛下は総兵の唐通を定西伯として居庸関を守備させた。唐通は居庸関の守備隊を連れて賊軍に降伏し、賊について北京に入った。賊軍は寧遠総兵呉三桂が山海関から入ってくるのを恐れて、賊軍を山海関に派遣して防御させ、呉三桂が河套から山西に侵入するのを恐れて、唐通を派遣して石峡を守備させた。しばらく前に、保徳の人陳奇瑜は五省の総督となったが、実は賊軍を車箱谷（車相峡とも書く）で解き放ったため、甲申の禍（明の滅亡）を招いたのであり、唐通はもともとその部下だったのだ。陳奇瑜は賄賂をよくとり、巨万の富を蓄えていたため、禍が降りかかるのを恐れて、こっそり唐通を招いて、その指揮下の兵隊に家を保護してもらおうとした。保徳は黄河に臨み、陝西の府谷と黄河を隔てて一望することができ、その距離は一二里足らず、険しく守りやすい地形であった。というわけで唐通は保徳に駐留し、部下の劉汝器を府谷に駐留させた。時に甲申の四月下旬であった。唐通はすでに李自成が陝西に敗走した事を知り、李自成に未来はないと悟り、またもや定西伯を名乗って先帝の霊を祭って哭したところ、黄河沿いのいくつかの州や県はすべて彼に従った。李自成は西安まで逃げて来ると、辺境地帯に変事が起こるのではないかと案じて、こっそり唐通に先の総督陳奇瑜と先の総兵尤世禄を捕えて西安に護送せよと命じた。尤世禄と尤世威の兄弟は仲が悪く、官を辞してからは別に府谷に住んでいた。それに先立ち、尤世威の一家は楡林で義に殉じて全滅していた。その時になって、唐通は陳奇瑜と尤世禄を西安まで護送させたが、三十里行ったところで陳奇瑜を呼び返し、尤世禄は西安に到着しないうちに自殺した。李自成はすでに唐通が自分に背こうとしていることを知り、兄の子の一隻虎李過が推した小瞎子なる者を派遣して、兵を率いて府谷を包囲させた。府谷の守りは厳しく、賊の先鋒王平は府谷を落とすことができず、誅されることを恐れて府谷の城に入り、さらに洪承疇の旗下に入り、後に湖南の総兵となった。李過はなおも全力で府谷を攻撃したが、ある夜全員逃亡した。おそらく西安が陥落したのを聞いて、李自成に従って襄陽まで逃げたのだろう。この時九壬が兵を率いて山西に行き、辺境一帯を攻略したので、唐通は部下を引き連れて降伏した。唐通の兵は規律正しかったので、保徳では彼をたたえる人が多かった。九壬（王？）は彼を引き連れて北京に入り、兵権を解き、定西侯に封じた。そのまま十年余り過ごしたが、気落ちして楽しまず、地方へ出て大きな町を治めようし、定西侯の印綬を返還すると、世宗皇帝はそれを受け取り、一品官を与えたが、地方へ出しはしなかった。唐通は康熙の初めに亡くなり、彼の息子たちの中には、恩蔭の制度で州県の官職に就くものが多かった。唐通は清に降ったが、劉汝器は降るのを望まず、自ら兵を解散させて農民となることを望んだ。後に姜瀼（瓖）が大同で反乱をおこすと、山西省全体が動揺し、汝器は高有才に従って府谷に拠った。有才は神木の人で、もともと賊軍であった。神木の僉事を殺害して反乱を起こした、彼は僉事道の奴隷であった。劉化麟は保徳に拠って反乱を起こし、

両者は唇と歯のように深く連携しており、清兵が包囲すること数年にしてようやく打ち勝った。有才の軍は食料が尽きはて、府谷の人間を皆殺しにして食べてしまったため、逃げおおせた人々は数十人にも満たず、汝器とともに川に飛び込んで自殺した。劉化麟は州の人の手によって殺され、人々はその首を持って軍営を出て降伏した。唐通は涇陽の人である。

第三十段

姜給諫爲余言、「張獻忠係膚施諸生、世傳爲兵家子者、非也。」存以備考。孫可望亦延長童生、既降、爲義王、居京師、使人訪其受業師、尚在、厚賚。

姜給諫[87] 余の爲に言う、「張獻忠係(は)膚施[88] の諸生[89] なり、世に傳えて兵家の子と爲すは、非なり」と。存して以て考うるに備う。孫可望[90] も亦た延長[91] の童生[92] たり、既に降りては、義王と爲り、京師に居る、人をして其の受業の師を訪(たず)ぬるに、尚お在り、厚くこれに賚う。

姜給諫が私に言った、「張獻忠はもともと膚施県の諸生であった。兵隊の出というのは誤りである。」心に留めておいて参考にしようと思う。孫可望もまた延長県の童生であったが、清に降った後で義王となり、北京に住んだ。人を遣って恩師を探させたところ、なおも健在で、手厚く贈り物をしたとのことである。

注

1　宋朱熹『通鑑綱目』漢紀に、「戊寅五年、莽の大夫揚雄死す。」とある。この条は非常に有名である。吉川幸次郎師の文章で、狩野直喜が、その師がこの一段を「莽の大夫揚雄がくたばりおった」と訳したと伝えておられるのだが、それがどの文章であったか失念した。博雅の指教を乞う。

2　特殊な筆法を指す。春秋の筆法の如し。宋羅大經『鶴林玉露』巻五に「魯史の舊文は、必ず隱公攝位の實を著わす、攝を去りて公と書すは、乃ち仲尼の特筆なり」とある。

3　「劇秦美新」は揚雄が秦（の始皇帝）を批判し、王莽の新を賛美した文章。『文選』巻四十八符命に収められている。

4　『容齋隨筆』巻十三に、「世儒或いは劇秦美新を以てこれを貶す、是れ然らざるなり、此雄已むを得ずして作るなり。夫れ新莽の德を誦述するに、能く暴秦よりも美なりに止まる、其の深意は固より知る可きなり。序に言う所の五帝に配し、三王に冠たり、開闢以來未だこれを聞かずは、直だ以て莽を戯もてあそぶのみ。」とある。

5　劉聰（?-318)、字は玄明、劉淵の第四子。永嘉四年、兄を殺して自立し、洛陽を陥落させ、数万人を虐殺し、晋の皇帝を毒殺した。漢の帝位につき在位八年で亡くなった。息子が即位したが、弑された。

6　石勒（274-333)、字世龍、劉淵に仕えて将軍となる。後に劉曜を殺して帝位についた。

7　冉閔（?-352)、字は永曾、魏郡内黄の人、石虎の養孫となり、石閔と名を改めた。349 年に石虎が死ぬと、冉閔は混乱に乗じて皇帝を自称し、大魏を国号とした。後前

燕に敗北し、捕虜となり死んだ。

8 『漢書』高帝紀上に、「項羽は人と爲り慓悍禍賊、嘗て襄城を攻めるに、襄城は噍類無く、過ぎる所殘滅せざる無し」とある。「無噍類」は漢書の注によれば、「復た活きて噍食する者無きなり。青州の俗、孑遺無きを呼びて噍類無しと爲す」である。

9 『魏書』巻百三に、「其の遷徙は水草に隨い、皮を衣(き)、肉を食し、牛羊畜産、盡く蠕蠕と同じなり、唯だ車輪のみ高大にして、輻數至って多し」とある。

10 韓愈の「原人」に、「故に天道亂れては、日月星辰も其の形を得ず、…人道亂れれば、夷狄禽獸も其の情を得ず」とある。

11 『尚書』大禹謨に、「道に違いて以て百姓の譽を干むること罔かれ」、孔傳に「道を失いて名を求むるは、古人これを賤しとす」とある。

12 攘臂：袖をまくりあげ、腕を露わにすること。興奮した状態を形容する。『老子』三十八章、「上禮はこれを爲してこれに應ずる莫ければ、則ち臂を攘ってこれを扔(ひ)く。」

13 付くこと、頼ること。依附。『文選』左思「魏都賦」に、「而うして子は大夫の賢なるも、尚お曾て等威を翼けんことを庶い、皇極に附麗し、正朔を稟けんことを思い、貢職に率うを樂まず」とある。

14 戴名世の「馬宛來稿序」に「良工有り、取りてこれを鑪冶の内に置き、鎔化鍛煉す」とあり、戴名世の常用する語彙であった。

15 おそらくとっくの昔に掘り出されて中の金は盗まれていたのだろう。

16 清代の文学者、方苞（1668 ～ 1749）、桐城派の創始者。戴名世の『南山集』の事件に連座して投獄されたが、後に釈放され、雍正、乾隆両朝に仕え、内閣學士兼禮部侍郎となった。

17 屠殺。『淮南子』泰族訓、「今夫れ祭する者は、屠割烹殺し、狗を剝ぎ豕を燒く、五味を調平する者は庖なり」とある。

18 『史記』孫子吳起列傳に「魯人或いは呉起を惡(にく)みて曰く、「起の人と爲りは、猜忍の人なり」と」とある。

19 『後漢書』蔡邕傳に「琴を彈く者曰く、「我向(さき)に弦を鼓(ひ)くに、螳蜋の方(まさ)に鳴蟬に向うを見る、蟬將に去らんとして未だ飛ばず、螳蜋はこれが爲に一前一卻す。吾が心は聳然として、惟だ螳蜋のこれを失うを恐れるのみなり」と」とある。

20 『戴名世年譜』巻二（48頁）におおむね次のように言う、趙鋐、字良冶、一號は鈍拙、順治十五年に生まれた、桐城の太學生であった。彼の家はもともと私財に富んでいたが、父の死後その財産はすべて兄に奪われた。彼は孝行者で一言も怨み事を言わず、他人への援助を惜しまなかった。戴名世はそのような彼を非常に尊敬していた。康熙五十三年に亡くなった。享年五十七歳。

21 「三更」すなわち真夜中である。

22 「業を輟(や)む」とは科挙の受験をあきらめることを指す。

23 『論語』先進篇、「子張善人の道を問う。子曰く、（古代の賢者の）迹を踐まざれば、亦た室に入らず、と。」

24 麻布製の喪服。

25 『史記』蘇秦列傳に「要約して曰く、「秦楚を攻むれば、齊魏各の鋭師を出して以てこれを佐(たす)く」と。」とある。

26 『漢書』朱博傳に「（朱博は）稍(しだい)に遷りて功曹と爲り、伉俠にして交わるを好み、士

大夫に隨從して、風雨を避けず」とある。

27 『論語』述而に「善人は得てこれを見ざるなり。恒有る者を見るを得れば、斯ち可なり」とあるのを使った。

28 「啣尾」は馬の轡と尻尾であり、ずっと繋がっているという意味である。

29 『論衡』禍虚、「惰窳の人、農に力め商に勉めて以て穀貨を積まず、歳饑饉に遭わば、腹餓えて飽かず。」

30 利馬竇（マテオリッチ）の方法であったかと記憶する。出処は失念した。

31 壁に穴を開けたり、垣根を超える行為、コソ泥を指す。『論語』陽貨、「色厲しくして内荏（やわら）かなるは、諸を小人に譬うれば、其れ猶お穿窬の盗のごときか？」

32 『抱朴子』外篇廣譬に、「凡そ木は根を靈山に結べば、匠石もこれが爲に斤斧を寢む」とある。

33 四川省に属する。

34 陳新甲の注を参照。

35 田弘遇（?-1643）、明の江都の人。崇禎帝の田妃の父。遊撃将軍、錦衣衛指揮。田妃が寵愛を受けると、左都督となったが、崇禎十五年に田妃が死ぬと寵愛が衰え、翌年なくなった。

36 監察御史として各地を巡視すること。

37 湯九州（?-1636）、明の池州府石其の人。崇禎年間昌平の副総兵となり、農民反乱軍を討伐し、河南・山西を転戦した。洪承濤に従い、農民軍と戦っていた時、包囲されて戦死した。

38 不辨菽麥：蒙昧無知な様を形容する。浮世離れし、実際の知識に欠けていることをも意味する。『春秋左傳』成公十八年、「周子に兄有りて慧無し、菽麥を辨（わか）つこと能わず。」杜預注、「菽は、大豆なり。豆麥は殊に形は別ち易し、故に以て癡者の候と爲す。」

39 田妃（?-1642）、明の陝西の人。後に揚州に転居した。田弘遇の娘で崇禎帝の貴妃となった。崇禎帝が信王の時に帝のもとに仕えはじめ、崇禎元年に貴妃となった。寵愛をたのんで驕慢となり、一時追放されていたが、後宮廷に帰還した。しばらくして病死した。

40 江蘇省揚州府の県。

41 浙江省の県。

42 陳新甲（?-1642）明四川長寿の人。萬暦の挙人。崇禎十三年、兵部尚書に任じられた。洪承濤が松山で包囲された時、満州人と和睦しようとし、崇禎帝の同意も得ていたが、和議が漏れて世論の非難を浴び、処刑された。

43 君主の信任を得ること。『孟子』公孫丑上、「管仲得君、如彼其專也」趙岐注、「管仲得遇桓公、使之專國政如彼。」

44 原文は「黨人」。一応東林党と解釈しておく。

45 左懋第（1601-1645）、明山東莱陽人、字は仲及、号は夢石。崇禎四年進士。崇禎十二年、戸科給事中となる。北京が陥落し、福王が即位すると、右僉都御史となり、馬紹愉とともに北京に赴いて和議の交渉をしたが、和議は成らず拘留され、南京陥落後、降伏を拒んで殺された。

46 瓜州は江蘇省揚州にある南北を結ぶ渡し場。

47 明の将軍耿仲明は清が入関する以前に清に投降し、功により靖南王に封ぜられた。

領地は福建であった。耿仲明の死後その子耿精忠が後を継いだ。康熙十二年（1673）から二十年までに清によって滅ぼされた。

48　安徽省の地名。

49　『古今圖書集成』所引『毛詩陸疏廣要』に、「蘭の種は甚だ多し。竹蘭、石蘭、伊蘭、崇蘭、風蘭、鳳尾蘭、玉柱蘭、珍珠蘭の類の如きは枚舉す可からず。」とある。（＊この項開放古籍平台による）

50　福建省の地名。現在の漳浦県。明の名臣黄道周は福建の漳海の人。

51　不詳。博雅の賜教を乞う。

52　南明王朝の年号。弘光元年は1644年。この年号を自分の文章で使うだけで文字の獄を起こされた例は枚挙に暇がない。

53　錢謙益（1582-1664）明末常熟の人、字は受之。萬暦三十八年進士、崇禎の初めに礼部侍郎となったが、辞職した。明が滅びると弘光帝のもとで礼部尚書となった。清が江南に侵攻するや先頭を切って降参し、順治三年、礼部侍郎となった。著書に『初學集』、『有學集』、『列朝詩集』がある。

54　豫王は清の王族多鐸（1614-1649）を指す。清の太祖の第十五子。順治元年に李自成を破り、南下して揚州を落とし、江南を平定した。

55　孔有德（?-1652）明末清初の遼東の人。明の総兵毛文龍の武将となり、崇禎六年、清に投降した。順治元年に清軍とともに山海関から侵入し、江南、西南の各省を転戦した。順治六年に定南王となり桂林に駐留した。李定国に敗北し縊死した。

56　従兄や甥を指す。『晉書』阮咸傳に、「群從昆弟、放達を以て行いを爲さざる莫きも、籍はこれを許さず」とある。

57　虎踞關は南京市内の地名。

58　浙江省の地名。

59　『浙江通志』巻百四十に、「孫業釗、餘姚人、房山知縣」とある。（＊この項開放古籍平台による）

60　湖北省の地名。崇禎十二年、ここに駐留していた明軍は張獻忠に投降した。

61　張獻忠（1606-1646）、陝西省延安府の人、字は秉吾、号は敬軒。明末農民反乱の統領の一人。河南、湖北を転戦の後、四川に入り大西国を建て、大虐殺を行った。後清軍に捕われ死亡した。

62　熊文燦（?-1640）、貴州永寧の人。萬暦の進士。崇禎の初年、福建巡撫の時、鄭芝龍の招安に成功し、名声をあげた。後に兵部尚書となり、反乱軍の招撫に勤め、偽って投降してきた張獻忠に軍糧を与えたが、後に張獻忠は再び反逆したため、責任を追及され処刑された。

63　按察使や布政使といった監察官の総称。

64　「傾觸」は意味不明。望文生義である。

65　この段は『世説新語』の汰侈篇に出てくる、石崇の宴会でのエピソードを意識した記述になっていることは明らかである。

66　杯をひっくり返して置くこと。酒を飲みつくすという意味。

67　無数に同じ。

68　指を突き出すこと。

69　李自成（1606-1645）陝西省の人。明末に農民反乱軍の長として各地を転戦し、崇禎十七年、北京を陥落させ、明を滅ぼした。

70　唐通（?-1664）、明末陝西省涇陽の人。崇禎年間、楡林守備から密雲総兵となる。崇禎十四年、洪承疇に従い錦州の支援に赴いたが、大敗して戻った。崇禎十七年、居庸関で李自成に降り、さらに清軍に降参した。康熙三年退休し、すぐに亡くなった。
71　北京近郊の昌平県西北にある要衝。
72　呉三桂（1612-1678）、明末清初の将軍。李自成が北京を陥落させると、清軍に投降し、山海関を開いて清軍を引き入れた。その功で雲南に領地を与えられた。後三藩の乱を起こし、周帝を称したが、次いで病死した。
73　陝西省の地名。
74　山西省の地名。
75　陳奇瑜（?-1645）、明山西保德州の人、字は玉鉉。萬暦四十四年進士。総督として陝西、山西、四川などで軍務に就いた。崇禎七年、反乱軍を車箱峡で包囲したが、偽りの降伏の計に引っ掛かり、包囲を解いて反乱軍を取り逃がしてしまった。その後辺境に流謫された。
76　河南省の地名。
77　陝西省の地名。
78　「先帝」はもちろん崇禎帝を指す。
79　尤世禄、明陝西楡林の人。尤世威の弟。寧夏の総兵となり戦功を挙げた。李自成が西安を陥落させた時に亡くなった。
80　尤世威、明陝西楡林の人。山海總兵官となった。後に李自成が西安を陥落させた時に、力戦して亡くなった。
81　李過（1606-1650）、一名を李錦、別号を一隻虎という。李自成の兄の子。最初は李自成の反乱軍に参加したが、李自成の死後に明軍と共に清に抵抗し、中国の南部を転戦した。広西南寧の軍中で病死した。
82　『陝西通志』巻九十八に、「甲申五月、張某叛するや、闖賊立ちどころに小瞎子を遣（や）りて兵萬餘を帥（ひき）いて城を圍ましむ」とあり、李自成の武将の一人であったと推定される。
83　洪承疇（1593-1665）、字は彦演、號は亨九。福建南安の人。明萬暦四十四年進士。崇禎年間、薊遼總督となり、清軍と戦って大敗し、降伏した。後清軍とともに各地を転戦した。後に致仕し、康熙初年に亡くなった。
84　湖北省の要衝。
85　不明。唐通が降伏した多爾袞を指すか？
86　陝西省の地名。
87　姜橚（1674-1704）、字は仲端、山西保德の人。康熙二十四年進士。麻城知県から給事中に昇進した。最終官は吏部右侍郎。
88　陝西省の地名。
89　科挙の第一段階の生員の資格を得たもの。
90　孫可望（?-1660）張獻忠の反乱軍に参加し、その義子となった。南明の永暦帝に帰順し、秦王に封ぜられた。後清に投降した後、南明政権の内部情報を報告し、義王に封じられた。
91　陝西省の地名。
92　府州県学の受験生。

要旨

戴名世（1653-1712）は江南桐城の人。塾師や地方官の幕僚として生計を立てていたが、康熙四十八年（1709）の殿試では、第二名すなわち榜眼となり、翰林院編修を賜った。康熙五十年、彼はその著『南山集』に不敬の辞があるとして、康熙五十二年に北京で斬首された。『憂庵集』は、戴名世が進士に及第する一年前、康熙四十七年に、長い間折に触れて書き溜めてきた雑文をまとめたもので、元々は200条余りあったらしいのだが、現在では残欠している最後の一章を含め、174条しか残っていない。『戴名世遺文集』編集者の一人韓自強氏によると、内容は、明史18条、清史13条、風俗人情27条、議論と文章論38条、商業・経済８条、花草樹木や自然現象51条、宗教やシャーマニズム13条からなっており、非常に多岐にわたっている。本訳稿では第九段から第三十段までを翻訳し、注釈を施した。